

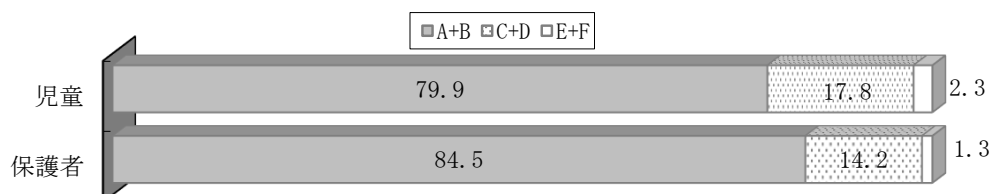
令和4年度 学校教育自己診断 小学校（共通項目）

1. 学校の生活について

児童 学校へ行くのが楽しい。

保護者 子どもは、学校へ行くのを楽しみにしている。

A:よくあてはまる B:ややあてはまる C:あまりあてはまらない D:まったくあてはまらない E:わからない F:無回答



〔分析〕

前年度比:児童+1.4%、保護者-0.5%

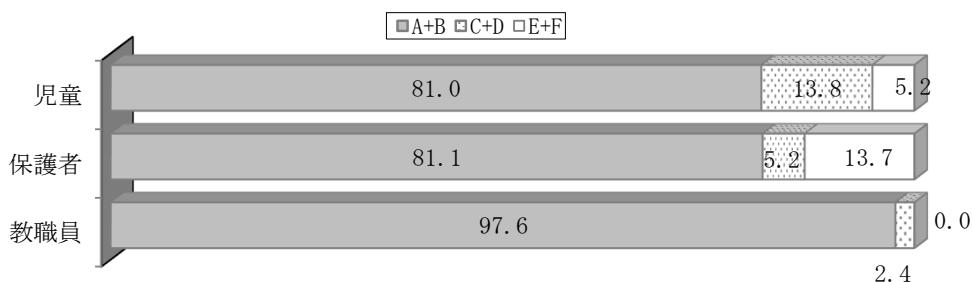
コロナ禍においても、各学校において、全ての児童が安心して過ごせる集団づくりや学級づくりを推進してきた。しかし、2割以上の児童が否定的な回答や無回答であることから、否定的な児童の意見を大切に、今後も引き続き、児童一人一人の個性や多様性を大切に、児童同士が互いの違いを認め合える集団を作り、全ての児童が安心して学べる学級・学校づくりを推進していくことで、児童の学校生活の充実を図る。

2. 「確かな学力」の育成について

児童 学校で、主体的に学ぶことは楽しい。

保護者 先生は、授業が「主体的に学ぶ力」がつくように工夫している。

教職員 学校では、授業が「主体的に学ぶ力」がつくように工夫改善を図っている。



〔分析〕

前年度比:児童-6.6%、保護者-4.4%、教職員±0%

前年度質問内容

児童:授業は、わかりやすい。

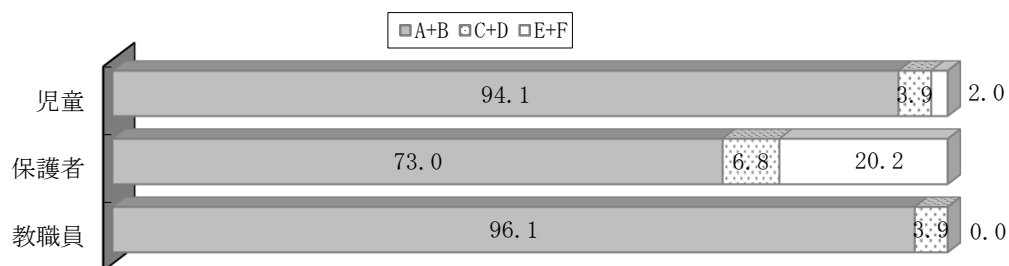
保護者:先生は、授業がわかりやすいように工夫しているようだ。

教職員:学校では、常にわかりやすい授業をめざして工夫改善を図っている。

前年度から質問内容を変更した結果、「主体的に学ぶ力」の意味理解や周知に弱い部分があったことから、児童・保護者の肯定的な回答が減少したものと分析する。今後も、各学校における校内研究や研修による授業改善を日々実践し、引き続き児童の関心・意欲を高める授業をめざした取組が必要である。また、教職員の肯定的な回答と保護者との回答結果にやや差があることから、今後も授業のねらいや目的等についても発信していくことが求められる。

3. ICTの活用について

児童 先生は、コンピュータやプロジェクターを使って授業している。
 保護者 学校は、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使ったわかりやすい授業を行っている。
 教職員 学校では、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使った授業づくりを推進している。



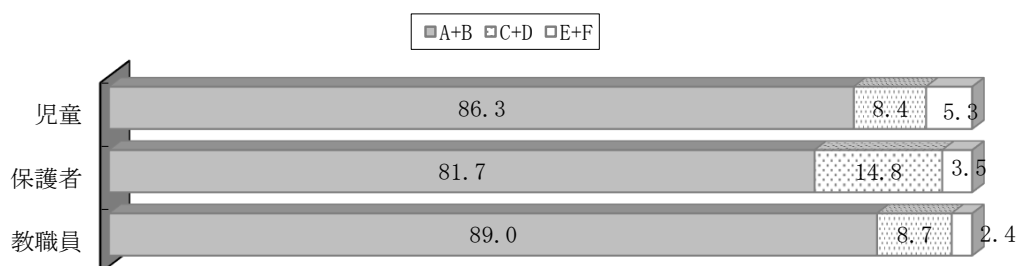
[分析]

前年度比:児童±0%、保護者-4.0%、教職員-0.7%

児童・教職員の肯定的回答が90%を超えており高い数値となっているが、ICTの活用にあたっては、学習指導要領の趣旨を踏まえ、各教科等において育成すべき資質・能力等を把握した活用を図ること。また、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善に生かすため、1人1台の端末をどう継続して活用し、その成果を発信していくかが課題となっている。保護者に対して、授業内容や様子等を学校だよりやホームページ等を活用して周知を行う必要がある。

4. 学校の通知表について

児童 通知表の内容は、納得できる。
 保護者 通知表は、よくわかる。
 教職員 学校の通知表は、児童・保護者にわかりやすく、適切な評価が行われている。



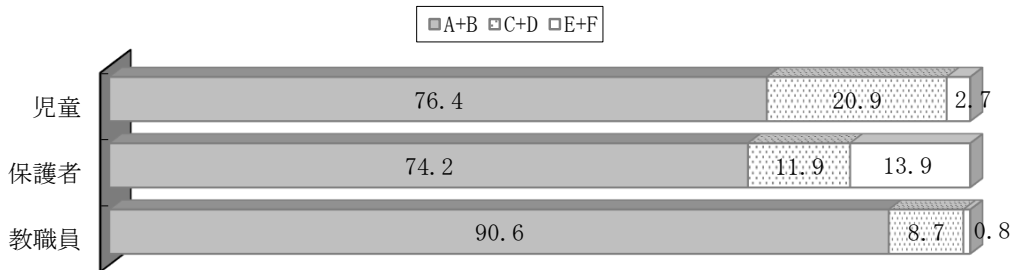
[分析]

前年度比:児童+0.9%、保護者+1.0%、教職員-0.6%

教職員が評価を見据えた授業づくりの観点を導入し、日々実践してきた成果と考えられる。通知表の評価を通して、児童自身が学習の成果と課題を見つめ直すきっかけとなるように、また、保護者と学校との信頼関係構築のための手掛かりとして機能していくように、今後も継続して取り組む必要がある。評価の妥当性・信頼性を高められるような準備と発信に努めていく。

5. 自学自習について

児童 自ら進んで学習(宿題、予習・復習、自主学習など)している。
 保護者 学校は、自学自習力の育成を推進している。
 教職員 学校では、自学自習力育成のため、学校全体で取り組んでいる。



[分析]

前年度比:児童+3.1%、保護者-4.1%、教職員+1.8%

前年度質問内容

児童:家では、自ら進んで学習(宿題、予習・自主学習など)している。

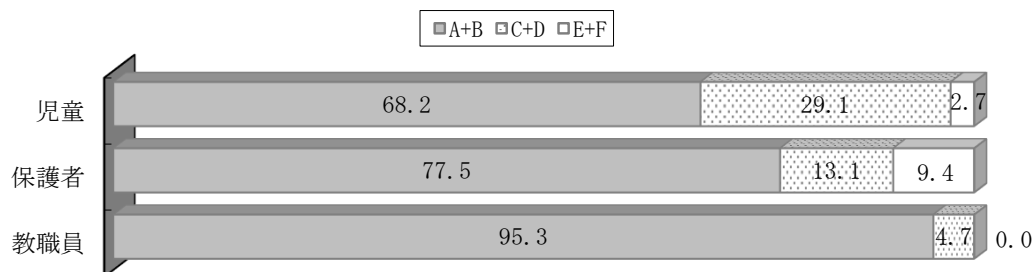
保護者:学校は、家庭学習の習慣がつくよう取組を行っている。

教職員:学校では、家庭学習の充実に向けて、家庭と連携するなど、重点的に行っている。

今年度から、家庭学習を含めた自学自習力を育成するための取組を推進してきた。児童が意欲的に学び学習効果を高めるよう工夫し、児童が「学び方」を学ぶために、1人1台端末を有効に活用し、家庭でも主体的に学べるよう指導してきた。児童自身が自ら思考し、表現することにより、自分なりの学び方を獲得できるよう、さらに探究を中心とした授業や単元づくりに努めていく。

6. 読書習慣について

児童 読書をよくする。(マンガ以外の)
 保護者 学校は、子どもに読書の習慣がつくよう指導してくれている。
 教職員 学校では、子どもの読書習慣の定着に向けた取組を、重点的に行っている。



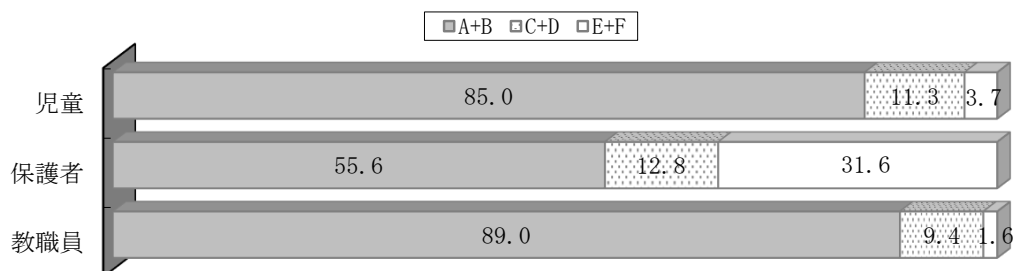
[分析]

前年度比:児童+2.7%、保護者+1.3%、教職員+2.5%

学校図書館専任職員と授業を行う教職員とが連携し、読書活動を推進することで、児童の読書習慣の定着に向けた取組を行ってきた。そのため、読書が好きな児童の増加や児童の読書習慣定着の傾向にはあるが、発達年齢に応じた読書指導については課題がある。また、読書活動や読書指導の取組について、地域や保護者にも積極的に発信していくことが必要である。

7. キャリア教育について

児童 学校では、自分らしく生きることや、将来について考える機会がある。
 保護者 学校は、学年に応じて、子どもが生き方や将来について、考えられるような指導(キャリア教育)を行っている。
 教職員 学校では、児童が自己の生き方を見つけられるよう、各学年に応じた系統的なキャリア教育を行っている。



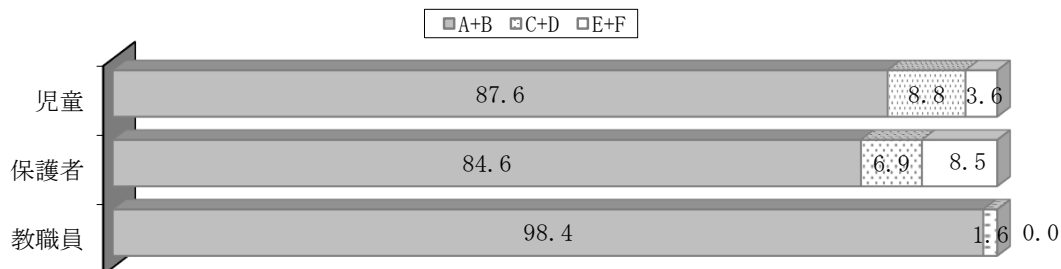
〔分析〕

前年度比:児童+2.9%、保護者+2.0%、教職員+5.8%

児童と教職員の肯定的回答が85%以上であることは、総合学習や道徳等、自分らしく生きることについて考える取組の成果が表れている。教職員の肯定的回答が大幅に増加しており、各校においてキャリアパスポートを活用した取組への共通理解が進んだことの結果である。今後も、キャリア教育に対する意識を児童自身の自己肯定感や自尊感情の醸成に重点を置き、全ての教育活動において展開していくことが求められる。一方で、保護者の肯定的回答が55.6%、「わからない・無回答」の回答が31.6%あることについては、キャリアパスポートを活用し、児童が主体的に自己実現に向かって将来を描く力の土台を形成していくことで、保護者への発信につなげていく。

8. 「心の教育」や規範意識の育成について

児童 学校では、お互いの違いを認め合い、人を大切にすることについて学ぶことができる。
 保護者 子どもは、お互いの違いを認め合い、人を大切にすることについて学んでいる。
 教職員 学校は、お互いの違いを認め合い、人を大切にすることを身につけるよう指導している。



〔分析〕

前年度比:児童-0.2%、保護者-0.5%、教職員+0.8%

前年度質問内容

児童:学校は、人に対する思いやりやルールの大切さについて教えてくれる。

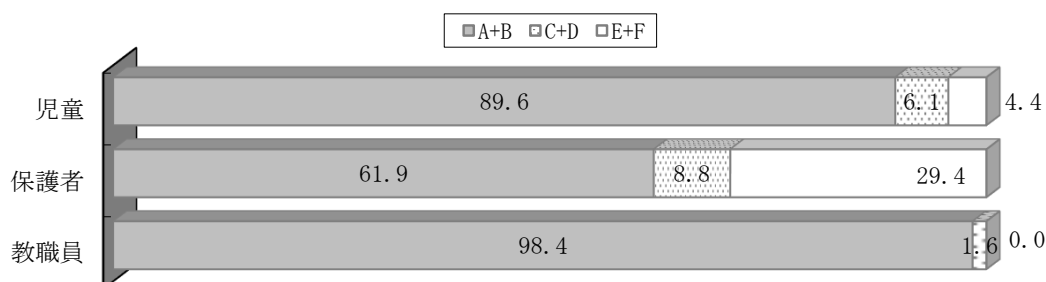
保護者:子どもは、人権の大切さや社会のルールについて、わかっていると思う。

教職員:学校は、人権の大切さや社会のルールについて、身につけるよう指導している。

全ての児童がこれからの社会を他者と共存しながら、自分らしく生き、持続可能な社会を創っていく力を付けるために、学校教育活動全体を通じて、児童が学び合い、他者を認め、自分の考えを伝え合える環境づくりを推進してきた。このような環境の中で、児童にとって必要な自己肯定感、自己有用感を高め、児童の人間関係を構築する力を育成していく。

9. いじめ防止・対応について

児童 学校では、いじめ防止の取組について学ぶことがある。
 保護者 学校は、いじめ防止・対応の取組を行っている。
 教職員 学校は、いじめ防止・対応の取組を組織的に行っている。



〔分析〕

前年度比: 児童-5.3%、保護者+3.3%、教職員±0%

前年度質問内容

児童: 学校では、「いじめはしてはいけない」と教えてくれる。

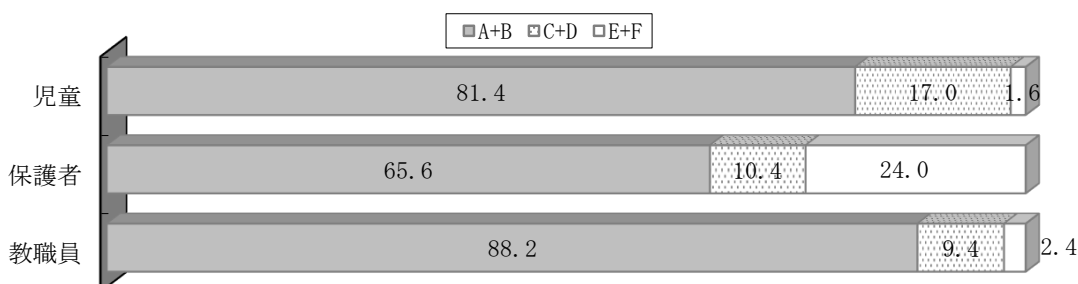
保護者: 学校では、いじめ防止や早期発見の取組を推進している。

教職員: 学校では、いじめ防止や早期発見の取組を組織的に行っている。

「いじめ対応リーフレット」等を活用しながら、いじめ防止の取組を計画的に行ってきた。今後いじめ防止の取組を「いじめの未然防止」や「いじめへの対処方法」等、より具体的な取組を行う。また、課題である保護者への情報発信に努めていくとともに、地域や家庭と連携したいじめ防止・対応の取組を推進していく。

10. 「食の教育」について

児童 給食の時間は楽しい。(低学年児童)
 自分の健康を考えて給食を好き嫌いなく食べようとしている。(高学年児童)
 保護者 学校では、子どもと食に関する話をしている。
 教職員 学校では、食に関する指導を計画的に実施している。



〔分析〕

前年度比: 児童-0.3%、保護者-6.0%、教職員+3.4%

前年度質問内容

児童: 学校では、「食」の大切さについて、考える機会がある。

保護者: 学校では、「食育」についての取組を推進している。

教職員: 学校では、「食育」についての取組を組織的に行っている。

児童の肯定的な回答は微減したが、引き続き高い数値となっている。学校給食や家庭科及び社会科の時間を中心に、「食」の大切さや「命」の大切さ、そして、地産地消の重要性などについて学ぶ機会を充実させてきた成果と考えられる。今後も、保護者に対しては献立等を通して学校における「食育」を発信し、教職員は、すべての児童が給食の時間を楽しみになるよう努めていく。

※令和2年度まで質問事項としてあった「保護者や地域との連携について」は、今年度新型コロナウイルス感染拡大防止の観点で学校行事などを中止したため、質問項目から削除しております。